

# 恐怖同盟

阿刀田高



# 恐怖同盟

阿刀田高



恐怖同盟

著者／阿刀田 高

印刷／昭和62年12月1日

発行／昭和62年12月5日

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社光邦

製本所／加藤製本株式会社

発行所／株式会社 新潮社

郵便番号一六一

東京都新宿区矢来町七一

電話〇三二六六一五一一（業務）・五四二一（編集）

振替東京四一八〇八

定価／一〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えます。



妖 163	耳 111	顔 5
雲 191	恐怖同盟 もくじ	血 31
道 217		鳥 59
老 247	疣 137	家 85

裝幀  
綿引明浩

恐怖同盟



顏



久しぶりにきれいな空だねえ。見あげているとまったく体が吸い込まれちまいそうだよ。「東京に空が無い」なんて、ひどいこと言った人がいるらしいけど、たまには本物の空が広がるときもあるんだ。安達太良山あだたらの山の上ばっかりじゃないわね。うん、有名な詩だもん。そのくらいは知ってるサ。

昔は、東京のどこからだって富士山が見えたんだ。今は駄目。あははは、富士山が動いたわけじゃない。見てごらん。どこもかしこもビルばかり。地平線なんかありやしない。ビル平線だな。たいていはマンションだね。この付近は特に多いんだよ。

人口が一千万人を越えちまって、今どき悪いことでもしなけりゃ一戸建てなんて持てっこないね。狭い土地に集合住宅でも建てて、ゴチャゴチャ住んでるよりほかにないんだ。

俺もそうだよ。

2LDK。女房は五年も前に死んじまったし、子どもたちは、それより先に所帯を持ったし、今は気楽に一人暮らしをしてるってわけ。

体が丈夫だしね。まあ、生きて行くくらいたぐの貯えはあるよ。週に三回だけ頼まれて雑貨屋の店番をやってるんだ。一日中部屋に閉じ籠こもっていたんじや退屈でいけない。体にも悪いしな。

この町？

まだ住んで一年とちよつと。以前は他のところにいたんだけどね……ちよつと事情があつてね。ここはいいところだな。公園も近いし、女子大もあるし。そうたくさんじゃないけど、緑の見えるのがうれしいね。若い女の子は見ていて楽しいよ。明るくつて……。

そう言えば、あそこに大きなアパートが見えるでしょ。ページュ色の……。ページュ色つたつて大分汚れて、黒っぽくなっているけれどな。あそこに朝夕鳥かすがずが集つて来てね。多いときには五十羽くらい、屋上の手すりにまつ黒い点を並べて止まつているよ。

どこから飛んで来るのかねえ。

好きじゃないね、鳥は。どことなく陰気な感じの鳥だもん。

なんとか言う映画があつたでしょ。

そう、そう、ヒッチコックの「鳥」。あれは鳥じゃなかつたのかな。とにかく黒い鳥だった。

見渡すかぎり何羽も何羽も声も立てずにジーツとうずくまつていて……。よく作るよ。いい気持ちじゃないわね。

死人が出ると、すぐ鳥が飛んで来るつて、本当なんだろうな。

えつ、聞いたことない？

そうかなあ。子どもの頃、よくそんなこと聞かされたなあ。

栃木にいたときに、家に長患いの祖父じいさんがいてサ、二、三日前から急に容態がわるくなつてたんだ。たしか俺が帰つて来たのは、桑畑の細い道だった。たいした家に住んでいたわけじゃないけれど、一応高台だったから遠くから家の屋根が見えるんだ。年上の従兄いとこと道を歩いて来たら、突然、その従兄が、

「祖父ちゃん死んだな」

低い声で言うんだ。怖かったなあ。

太陽が沈んだすぐあとで、夜が走って来る。山のほうは早いからね……。風もいつもと吹き方がちがっていて、やけに冷たい。遠くの並木が急にわさわさと揺れだしたりする。人はこんなときに死ぬんだな、そう思ったよ。

「なんでわかる?」

「烏が来始めた」

顎で指す先を見ると、黒い烏が二羽、高い空からゆっくりと屋根の上に降りて行く。近づくにつれてもう一羽増えた。

「なんで烏が来ると死ぬの?」

「匂いでわかるんだ。烏は待ってたんだ」

烏が臓物を食べるのはよく知っていたよ。人間が死ぬと、ご馳走にあずかろうとして集って来るらしい。屋根に止まった烏は、首をすくめて、なんか、こう、舌なめずりでもしながら待っているような様子だったな。

「たがいま」

家に帰ると、やっぱり祖父さんは死んでいた。ほんの少し前に息を引き取ったところだった。驚いて庭へ出て見ると、もう一羽増えていたよ。

匂いでわかるのかどうか、まったく厭な鳥だよ、あいつは。

結構頭はいいし……肉はまずいし。烏を食った話って聞かないもんなあ。鶏くらいうまかったら、ああはたくさん屋根の上に整列していられんよ。人間に食われちゃうからなあ。

共食いはしないのかねえ?

あんた、不思議に思ったことないかね。鳥でも猫でも犬でも、まわりにいろんな動物が生きているけどサ、そのわりには死骸って見ることがないわな。

犬や猫は飼い主がいて、自分のすみかがあるだろうけど、それだって野良犬、野良猫がいるわけだろ。みんながみんな自分の家で死ぬるわけじゃない。鳥や鳩なんかたくさん群がっているんだし。結構大きい鳥もいるよ。落ちてりや気がつくはずなんだが、飛んでるのをよく見るわりには、死骸は見ないねえ。死なないわけじゃあるまいし……人間よりよっぽどよく死んでんじゃないのかなあ。どこに消えちまうんだ？

死体なんて、案外すぐそばに転がってるものかもしれないね。動物だけじゃなく……。

ほら、何年前か前、池袋で事件があつたじゃないの。アパートのベランダに四角いセメントの台が置いてある。なんに使うものかよくわからんけど、洗濯物を干すときの踏み台にもなるし、植木鉢なんか置くのにもいい。

アパートに住む人は、次々に入れ替るけれど、みんなそんなふうにして利用してたんだな。

ところが、その中に女が一人入っていた。新聞の写真で見ると、ちょっときれいな女だったけど、セメントの中から出て来たときは、きれいってわけにはいかんよ。あははは、俺、見たわけじゃないよ。見ないけど、わかるさ。そのくらい、だれだって……。

踏み台や植木鉢の台にしていた連中は、あとで聞かされて驚いたろうね。

犯人はどういう男だったのかな。新聞記事で読んだはずだが、そっちのほうはすっかり忘れちゃったなあ。

しばらく死体が見つからなかったところをみると、犯人はわりと腕がよかつたんじゃないの、セメント細工の……。

素人がやると、すぐに隠した死体が中から出て来たりしちゃうんだ。セメントなんてももの、ピルを作ったり橋げたを作ったりするんだろ。だから、そんなに簡単にこわれちゃう困ると思うんだけど、素人があわててやるからやっぱり失敗するんだよな。たいていはセメントの量が足りないらしいよ。たつぷり使つて、水や砂利とよく混ぜあわせて、丁寧にやれば、そう簡単に中のも物が出て来るわけがない……。

ううん、やつたこと、ないけどサ、そんな気がするんだ。せいてはことを仕損じる、つてね……。バラバラ事件を担当した弁護士から聞いたことがあるんだけど、犯人は本当に驚いて気が遠くなるらしいね。

殺人事件なんてももの、推理小説じゃ一年も二年も前からアリバイがどうの、密室がどうの、いろいろ計画を立てたりするらしいけど、現実はそうじゃないわね。九十九パーセントまでは衝動的なものでしょうが。ついカーツとなつて殺してしまう。気がつくとも、死体が一つ転がっている。

——ああ、いかん——  
揺すつても叩いても、もう生き返つてはくれない。

——えらいことしてしまった。さあ、どうしよう——  
死体の存在感に打ちのめされつちまうらしいよ。

死体はまず重いんだ。  
死んだからつて急に重くなるはずはないんだけど、なんだか急に重くなったみたいに感じるそうだね。

そのうえ日持ちが悪い。すぐに腐り出して厭な匂いを出す。これだつて死んだとたんにくさく

なるはずはないわな。

でも、殺した本人には、すぐに匂いが感じられる。スーッと匂って来る。一日二日たてば、これはもう本当に腐り始めるから、匂いが立つ。それがどこへ行つてもついて来る。追いかけて来る。四六時中その匂いに包まれているような気がして、これがやりきれない。

そのうえ、死体はやつぱり厭な顔をしているからなあ。殺された死体は特にそうだよ。できれば見たくない。見ないように、見ないようにしているけれど、うっかり見てしまう。

とたんにひどい顔つきと目があつてしまう。むこうは白眠なんかむいてて……。

犯人はみんなうろたえて、なんとか目の前から死体をなくそうといういろいろ考えるらしいね。それでお風呂に運び込んでバラバラにしたりするんじゃないの。

馬鹿な……。弁護士から聞いた話だよ。しかし、気持ちにはわからんでもないねえ！。

話はちがうけど、あんた、カラオケが好き？

ああ、本当。好きでも嫌いでもない程度、人並みにつきあうくらい……。

そりゃ、やつぱり好きなんじゃないのかなあ。好きかどうかって尋ねると、たいていの人があるという答を言うんだよ。

ところが実際にカラオケ・バーなんかに行つてさア、

「一曲どう？」

勧められると、ちょっと迷惑そうな顔なんかして、

「うーん。新しい歌、あんまり知らんからなあ」

なんて渋つてるんだ。

ところが一曲歌つちゃうと、もういけないよ。

「もう一曲、歌つてもいいかな」

「どうぞ」

もう一曲のほが二曲になり三曲になり、そのうちマイクを握つて離そうとしない。

あれ、どういう心理なのか……。

人間で、そういうところがあるんだわね。自分で自分に酔っちゃう。

俺だつて、こんなにおしゃべりをするつもりはなかったんだけど、なんだかだんだん話したくなつちまつたよ。

秘密つて、かえつて話したくなるんだ。「王様の耳はロバの耳」なんて……。

しかし、すっかり日が短くなつたんだなあ。

さつきまでまつ青だつた空がかげり始めたもん。あつと言うまに夜になつてしまふよ。

鳥が飛んで来ただろ。

どこかに死体くらいあるサ。これだけ人間が住んでいるんだから。あのマンションかなあ。

中学生のとき建築家の息子が友だちにいてさ、一度そいつの家に遊びに行つたことがあるんだ。

へんてこな家だつたなあ。

「うちの親父変つてんだ」

「親父さんが設計したのか」

「まあな」

家族が留守だつたから、いろんな部屋を見せてもらった。まるい部屋。これは、まあ、いいさ。まるい映画館とか、まるい会議場とか、世間になくもない。だけど、三角の部屋、五角の部屋つ

てのは、どういうつもりで作ったのか、不思議な構造だったね。

中にすわっているときは、とくに不自由することもないけどサ、ところどころに妙な形のすきまができてしまう。それがやつぱし困るんじゃない？　そういうすきまは、みんな押入れになっていたよ。

「人に勧めるわけにいかないから、自分で住んでるんだ」

「うん？」

あの男、どうなっただろう。

画家志望で、しばらくはピカソばりの抽象画をかいていたけど、あれはあんなへんてこな家で育ったせいじゃないのか。

建築家つてのは、まったく不思議なものを建てたがる連中だよ。黙ってまかしておいたら、なにを設計するかわからない。蝸牛かたむねみたいな家や、さかさになっている家や……住むほうが面くらつちまうよ。

マンシオンなんかも思いがけない仕掛けがあるかもしれないね。住む方は大きなビルのほんの一部だけ買って、全体がどうなっているかなんて、そんなことあんまり考えもしない。隣にどんな人が住んでいるか、ほとんど気にもかけないもんな。

怖いね、考えてみれば。

昔のお城なんてところは、吊り天井とか陥し穴とかがあつてサ、映画で見ただけだけど、本当にそういう細工がやつてあつたと思うよ。だれも知らない秘密の座敷牢なんか確実にあつたね。

マンシオンにも秘密の地下室があつて、そこへ入ったらもう出られない。その気になつて作れば簡単にできることだもん。壁と壁のあいだにだれか知らない人がひっそり住んでいたりし



て……。

そういうこと考えたりしないかなあ。

やっぱり俺がおかしいのかね。

見かけはどうってことないサ。絵本の中のお化け屋敷じゃあるまいし、見たところはなんの変哲もない。

現に、しばらくは俺もなんにも気づかずに暮らしていたんだから。

今、住んでいるところじゃないよ。あんまりはつきりとは言いたくないけどネ、少し前に住んでいたとだよ。

上下左右、物音がほとんど聞こえるってことがなかったから、

——壁が厚手に作ってあるんだな——

そう思っていたよ。

その前に住んでいたマンションは、上の部屋の足音がもろに響いて、往生したんだ。それに比べれば、近所の物音は聞こえない。

ただ……時折、水音みたいなものが聞こえて来て、

——これは、なにかいな——

耳をそばだてたことはあつたな。あとで思い出してみると……。

大きなフランス窓のついた洋間があつて、その窓から町の様子がよく見えた。ちょうどその左側の壁に本棚を立てておいたんだけど、たまには部屋の模様替えをしてみたくなつてね。

マンションなんでもの、計算ずくで設計してあるから、あんまり模様替えの余地はないんだ。

せいぜい本棚を左の壁から右の壁へと動かす程度のものだつたよ。